

松屋外集 二編

卷一

1398
1



1398
1

高田早苗
氏



折符川一册 字告明一 已小正也

神中喉也 右曰蜀川符匣川力扣編 右曰

瓶口雙柄巧珠一册川中 申報也 區大

右河也 一册川大 右書 瓶口 右

共區 瓶口 右書 瓶口 右書

瓶口 右書 瓶口 右書

松屋

瓶口 右書 瓶口 右書

扶桑 松屋 瓶口 右書

瓶口 右書 瓶口 右書

又曰

分區... 卷第十九

有大... 卷第十九

扶桑拾遺集抄卷第十九

卷第十九

扶桑拾遺集抄卷第十九

日无... 卷第十九

三ノノ

分區... 分區... 分區...

松屋外集二編卷之一

華頂殿侍傳學士兼山田與清稿

○扶桑指母身抄卷第十九格等記上
崇光院

崇光院 一丁表

第九十九光嚴院第一御子

紹運錄子第九十八崇光院... 興仁... 登仁... 倭内大臣公秀... 女建武... 廿二降誕... 廿八... 親王同十三立太子... 貞和四十七踐祚... 十五同... 廿六即位... 觀應二十一... 二十七日... 帝位... 同十二廿三被... 内侍所... 同廿八被... 尊

号又十八同三因二依南方新主天氣渡御
 勝軍陣西上皇光嚴光明延文二二十八奉
 伴太乙法皇出南山御在幸伏見他居
 明德三十一晦御落飾法詳勝圓下應
 永井并三十一續和皇正統紀實
 代記歷代皇記皇事代略記太平記南朝
 知修三十一
 老嚴院三十一
 信傳錄九十六光嚴院謀仁母廣
 新院三十一正和二十七九降記八十七三親五

於南方行宮宣下云由翌年正月
 三月被宣申御年十八
 依新主天氣渡御勝軍陣西上皇御三
 月三日奉移河州東條延文二年二月十八日
 幸伴太乙法皇御出山居於伏見殿明
 德三年十月晦日於伏見殿御出家廿九
 日元年无極和尚宣下云御戒即應永平元年寅
 常光御降道号空谷名明德
 正月十三日册于伏見御莊春秋二十九
 以後の御子太平記南朝紀傳櫻雲記也
 櫻雲記新撰和漢合面下皇和皇傳道
 本朝證号雜記

卷之三
 光嚴院 二十卷
 紹運錄光嚴院 皇仁母廣新門院
 公衛 正和二七九降誕八十七立親王 嘉曆
 元七廿四立太子 十元德元三廿八元服 元
 弘元九廿踐祚 在慶二五七依天下亂
 立上皇而院御波落東且此間為初州 詔
 命孝道皇位同二十被獻大上皇尊號
 廿觀應三國二廿依南宮立天氣從他
 驛於八幡軍陣 兩上皇并新院崇光春宮
 八月日於河州行宮御落節 法諱 賜克
 智御戒師西大寺元耀上人延文於河州

卷之三
 光嚴院 二十卷

卷之三
 光嚴院 二十卷
 紹運錄光嚴院 皇仁母廣新門院
 公衛 正和二七九降誕八十七立親王 嘉曆
 元七廿四立太子 十元德元三廿八元服 元
 弘元九廿踐祚 在慶二五七依天下亂
 立上皇而院御波落東且此間為初州 詔
 命孝道皇位同二十被獻大上皇尊號
 廿觀應三國二廿依南宮立天氣從他
 驛於八幡軍陣 兩上皇并新院崇光春宮
 八月日於河州行宮御落節 法諱 賜克
 智御戒師西大寺元耀上人延文於河州

離^京由良覺明和尚者念若禪衣此等即諱上勝
字被同二二奉伴新院出南方奉伏見
 殿貞治三七七册於丹波國山田廿十以此
 同即庵号被擬追号是依遺初也
 幕中抄人代今上由良女皇仁院号二所
 子由良房親門院高左五新院若禪衣踐
 祚元弘元年九月廿日即位嘉曆元年
 七月日云拾号抄上末人皇部卷九六
 光嚴二皇仁云下神明鏡卷九若伏
 光嚴院後伏見院紀子請旨仁元弘元

自十月廿日新拜十九日即位也續神
 皇正統記子弟九十六代光嚴院諱仁
 仁後伏見院弟一子由良母由良親門院
 入左大臣公衡の女也壬申の年即位改
 元一正慶元年也同二年六月後
 自西院片入格のりより一立六片
 位と退す也其のりより一西院も
 一也其のりより一但程のりより一二月
 号号と敬也諱其のりより一
 觀應元年八幡より一なり又加名を

の還作、河内より来りて、
衣も之、
所納りも、
代詔も、
皇子、
治三年、
二、
三、
弟一皇子、
正和二年七月廿五日

降誕、同年九月七日立親王、嘉應三年七月廿四日立太子、元徳元年三月廿八日元服、
元弘元年九月廿日踐跡、其同年三月廿二日御即位、
依天下乱、
日以後、
嚴院、
門院、
二年、
親王、
嘉應元年七月廿四日立太子、

德元年三月廿八日元服元弘元年
九月廿日 踐跡十九年 正慶二年五月
廿日 六波羅城敗績 仲時等奉伴主
上上皇以下赴東國 於海邊場仲時等
同十日遷御伊吹山太平護國寺 暫以此
在兩院以下又同御此寺 此同為伯州詔
命 奉遷皇位 元年又廢正慶二
江州還奉於京都 三月十日被獻太上天
皇 尊号 廿三 觀應二年二月廿日
依新皇天氣 促他歸於八幡軍陣 西上皇
新院并

德皇直仁親之壽 四
夕所御同車 五月十一日遷御於賀
名生離宮 是新年 常年失利 八月十日於河
州行宮御落飾 時御戒而更光智御授衣之
延文元年 月日於河州離宮 由良覺明
和尚奉念著禪衣 此時御講上勝 二年二
月十日奉伴新院 出御從離宮奉伏
見敷 其後進也別知 貞治 二年 七月七日
崩御 丹波國山田 若秋丑 天下諱圖以此
間御庵号 被擬追号 奉光嚴院 是
依遺勅也 抄于此院の由了 太平記 南
神明鏡

朝紀傳、櫻雲記如皇院手抄記、新撰和漫合書下、皇極具
信通本朝、經号雜記等、云々

天下みかほりて二丁裏

太平記卷廿の南朝と北朝の事、御和陸の事、
足利宰相中お我詮朝臣にお軍鋪倉へ
下り信と此時京都守護を為す御抄に
ケルが因末の合戦、左右ハイマ同天、京
都以外を勢ナリ、角テ如何様和田
橋ニ寄ラレテ、云甲斐守ナリ、京ヲ落サレト

オボシレバ一旦事ヲ謀テ姑ク治中ヲ為
ナラシメ、為ニ台野殿一使者ヲ立テ、自今
以後ハ御治世ノ御事ト、目衛郷得、是ニ
本家領家、身来、追止ノ地ニ於テ、武家
一向共イロヒツ止ベキニテ候、只承久以後、
新補ノ年法、是ニ因テノ守護職、地頭、
御家人ノ所帯ヲ、武家ノ成敗ニ許サレテ、
君臣和睦ノ恩恵ヲ施サレ候、武臣七徳
ノ干戈ヲ、戦テ聖主万歳ノ宝祚ヲ仰
奉ルベシト、頻々奏聞ヲゾ、信ラレシケル、是ニ

依テ諸卿僉議有テ先^{サキ}之直我入道和
睦ノ由ヲ申テ言^{コト}下^ニ之^{コト}又^ハ是^レモ亦^モ偽^クテ
申ス傳^ハ子^ノ細^クナ^リ覺^スレ^バ凡^ソ謀^ハ一^ニ途^ニカ^シバ
先^ニ新^シ証^ヲガ^キ申^テ旨^ニ任^セラ^レシ^テ帝^ノ都^ノ還^ル幸^ニ
ノ儀^ヲ儀^シテ^ハ後^ニ新^シ証^ヲス^ル儀^内近^ク目^ノ
勢^ヲ以^テ對^シ治^シン^ニ尊^氏氏^ノハ^ハ新^シ負^ガ子^ノ是^レ
何^ノ附^テ追^テ討^セス^ルニ^ハ何^ノ仔^細カ^ク有^リキ^ト
テ^ハ御^同旨^再往^スモ^及ズ^ル然^レ合^テ傳^ノ事^ノ
子^細ア^ラス^トゾ^ハ何^出サ^レケ^ル兩^方互^ニ偽^シテ^ハ
趣^誰カ^ハ知^ベキ^ナズ^バ此^間持^明殿^方ニ

拜^趨セラ^レケ^ル諸^卿皆^賀名^生殿^ハ考^ラ
ル^ニ又^ハ同^持明^院兩^院主^上遷^幸吉^野
の^方ニ^ハ二^ナ三^日中^院中^お具^忠ヲ^初使^スニ^テ
都^ノ内^裏ニ^ハカ^シス^ニ三^種神^器ヲ^吉野^ノ
主^上ハ^後シ^テ考^ル是^レハ^先帝^ノ山^門ヨ^リ武^家
一^所出^シ有^リ所^{アリ}モ^アラ^ズ物^ヲ取^替テ^ハ持^明
院^殿ハ^後サ^レタ^リ物^をバ^トテ^ハ南^宮ノ^御
箱^ヲハ^集メ^シ金^刺ト^内侍^所ト^テ近^習ノ^御
雲^若下^サテ^ハ衛^尉ノ^大刀^{裝束}ノ^鏡ニ^テ
成^サレ^ケル^ニ同^サ七^日北^宮右^衛門^督顯

能兵五百年騎ヲ乗リテ持明院殿へ参リ
先其也ノは門々固メサセケバハヤ
武士トモガ参リテ院内ヲモ笑ヒ追ラセシ
トスルハトテ女院皇后御ニテ速ハス伏
沈ニテ路ヒ内侍ト重上臈女房トハ行
来モシラズ此ハ此行ニサシラスサ
毛頭御卿穂ニ西ノ門ヨリ参リ夫四
大納言隆蔭御ヲ以テ世ノ静リ候ニ
程ハ皇居ヲ南山ニ移シ直ラズベシトノ勅
詔ニテ候ト考セラレケレバ西院主上東宮

アキレサセ給ヘシ計ニテ免南ノ御言ニモ及ハ
ズ只御流ニシテ来レサセ給ヒテ置敷ノ御
袂ニシテ計ニ成ニテリト再始リ有テ新院
御流ニサセシ御事ト云テ乱ニ由テ後
傳事書傳事ト云テ御事ヲ二両差
寄テ餘リニ時刻移候ト急ケバ本院殿
院ニ新院殿光明院主上^{崇光院}若宮^{直仁}
惟御同車有テ南ノ門ヨリ出御ナリ
鳥羽迄御事成ルニ初ハ早ホノ明テ
又此ニテ御事ヲ駐テ怪シクナル御代與

召替サセ進ラセ、日ヲ恒テ吉野ノ奥
賀名生ト云所へ即幸サシ奉ル云々、皇年
代略記云、崇光院觀應二年十一月七日奉
廢之、武和隆賀名生、正平六年十一月廿三日被
後内侍所花神、皇於南方、同廿日被奉
太上天皇尊号云々、吉野指遺云、正平壬
辰の年の春、馬都の立上本院新院と云
人となをもて、いけしきと云々、
あの所、あのおき、いけしきと云々、
さびく、いけしき、いけしき、
いけしき、いけしき、いけしき、

いけしき、いけしき、いけしき、
いけしき、いけしき、いけしき、
いけしき、いけしき、いけしき、
いけしき、いけしき、いけしき、

いけしき、いけしき、いけしき、
いけしき、いけしき、いけしき、
いけしき、いけしき、いけしき、
いけしき、いけしき、いけしき、

光明院 三ノ裏

紹運録子光明院諱豐仁治十二年母
同為光嚴院御猶子元尊元十二世降誕
同二十三立親王二建武三十五踐阼十六
元同四十二廿八即位貞和四十七祥位廿八十一
廿五尊号觀應二十二廿八御落飾三十法
諱真常忠文和四十八自河州東條行
宮出御伏見殿其後御存安奈自云身著
角云其後河御徑行康曆二六廿四前
於勝尾奈御尊存春秋七十日未奉号号光
別慈御遺云續神皇正統記号昇九十八代
初云

光明院諱豐仁後伏見号二御子光嚴
院の御猶子也御母廣我門院丁丑の年建
御即位云中宣改元曆應とも又以系の
延元号も用はた建武号なりを曆應と
ふりり得るき天も治なり十二年尊号
何のとし御降ありて御降終り六十
歳ありくきき皇代部新院諱豐
仁後伏見院号二皇子御母廣我門院治
十二年建武三年八月十五日踐祚春秋觀
應二年七月廿九日御降飾御降名三歴

代皇記子光明院後伏見第一皇子太上天
皇為子世廣新門院元應三年三月廿二日
降誕元亨二年二月廿二日立親王二建武
三年正月廿日踐祚十六四年二月廿日御即
位增廳貞和四年十月廿七日禪位同十月
廿八日為太上天皇元年皇年代略記子光明院
諱豐仁後伏見院等二皇子上皇御猶子
母同太上天皇在位二十一年元亨元年十二月
廿三日誕生元亨二年戊辰二月十三日立親王二
建武三年丙子八月廿五日踐祚十七四年十

二月廿日午即位十六大曆應元年十一月廿

日壬午太上天皇親應貞和四年十月廿七日

禪位於皇太子十月廿五日太上天皇尊号廿八

觀應二年十二月廿日俄以御落飾廿一御

云法詳真常意後戒所泉是日於賀名生

宮被宣下太上天皇尊号云云三年閏二月

廿日渡御八幡軍陣上皇御三月三日自八

幡遷御河内国東條城文和四年八月

四日自河州東條行宮出御伏見殿此間在

著禪衣御授覺明上人其後遷御

當所法安寺。自去年月日只著御所云々
御徑行康曆二年申六月廿四日刻崩
於於勝尾山年有孝号光明院
德勅不改其号云々 以外園大曆太平記
難太平記南朝紀傳櫻雲記拾芥抄如
是院年代記新撰和漢合圖下左朝鑑
雜記云々 以上云々の云々

遷部

園大曆正平七年 同二月廿日の子藏人
右得明權佐先資為初使入来平語云々

所詮御所云々可平八階之由也仍即傳
申仙洞畢御書道之上先資示畢返又
申入畢只今御車以下無用意示進之由
沙汰云々日没程出御于時微雨御供教
言朝臣并北面康兼誅也後用實音
朝臣又依御参向云々二十二日午重古法
丸束云御幸云夜還留東寺今朝出御
幸六幡云夜今朝在後御用意仍自他
洞女房沙汰道之云々三月四日開昨日江
州已裝来八幡之由就其駭動三院并

宮御方被_レ奉_レ移_レ東條又_レ梶井尊胤親王
去_レ比被_レ考_レ同_レ被_レ送_レ彼_レ也_レ而_レ此_レ風_レ聞_レ虛_レ說_レ
利_レ義_レ諺_レ以下_レ引_レ退_レ不知_レ行_レ方_レ云_レ大炊_レ御_レ門
元_レ大_レ納_レ言_レ氏_レ忠_レ卿_レ未_レ謁_レ之_レ去_レ夜_レ上_レ皇_レ已
下_レ幸_レ東_レ條_レ御_レ輿_レ侍_レ奉_レ人_レ實_レ言_レ朝_レ臣_レ也
教_レ言_レ朝_レ臣_レ自_レ内_レ裏_レ不_レ可_レ考_レ之_レ旨_レ被_レ御_レ仍_レ上
北_レ面_レ範_レ康_レ舍_レ弟_レ範_レ之_レ相_レ副_レ御_レ輿_レ梶_レ井_レ宮
垂_レ髮_レ一_レ西_レ人_レ坊_レ官_レ一_レ人_レ同_レ步_レ行_レ相_レ從_レ云_レ六
月_レ二_レ日_レの_レ考_レ或_レ云_レ上_レ皇_レ等_レ東_レ條_レ御_レ座_レ之_レ同_レ
陪_レ從_レ之_レ仁_レ不_レ義_レ仍_レ女_レ房_レ可_レ考_レ候_レ之_レ旨_レ有_レ沙_レ汰

明日_レの_レ可_レ考_レ候_レ史_レ度_レ之_レ家_レ今日_レ可_レ被_レ奉_レ
遷_レ賀_レ名_レ生_レ之_レ旨_レ被_レ申_レ云_レ二十五_レ日_レの_レ考_レ同_レ
女_レ房_レ等_レ依_レ品_レ考_レ賀_レ名_レ生_レ他_レ洞_レ御_レ方_レ各_レ
臺_レ人_レ上_レ皇_レ御_レ方_レ
新_レ等_レ相_レ典_レ侍_レ 法_レ官_レ御_レ方_レ 中_レ御_レ方_レ
在_レ信_レ之_レ時_レ 宮_レ御_レ方_レ 勘_レ御_レ方_レ
在_レ信_レ之_レ時_レ 宮_レ御_レ方_レ 勘_レ御_レ方_レ
記_レ東_レ寺_レ長_レ者_レ補_レ任_レ祇_レ園_レ執_レ行_レ日_レ記_レ抄_レ太平
廿_レの_レ卷_レ持_レ明_レ流_レ兩_レ院_レ主_レ上_レ 女_レ房_レ等_レ依_レ品_レ考_レ賀_レ名_レ生_レ他_レ洞_レ御_レ方_レ 各_レ
○遷_レ幸_レの_レ故_レ實_レ格_レ安_レ卷_レ下_レ遷_レ幸_レ是_レ天_レ子
御_レ從_レ移_レアル_レ云_レ了_レ也_レ云_レ晉_レ書_レ天_レ文_レ志_レ卷_レ下

統日本後九廿の巻
明丁酉 二年三

天皇落飾入
清澄受持戒

十五表 竊尋復護之
重在禪所先解脫之因
落飾之入又親高詔
降於盤石落飾於天
人言

子永嘉三年 青屋子
受惑犯此學微 大史令高
堂冲美乘輿且遷 卒不犯之流陽

右記之落飾之事 以十七卷十九
可定其年限也 慈恩傳 聖表云并
出自凡品 夙行 業既蒙落飾 云才
法師既荷 聖澤 奉表 詣闕 陳謝 曰
云伏惟 皇帝 陛下 寶圖 御極 金輪
乘正 曉茲 釋教 載懷 宣闕 以為 落
飾 云門 外 異 俗 云 云 云 俗 飾
云 云 云 出家 云 云 云

○丹波國高野何度郡山田水
春山國山家陣屋と云云

三表

東宮は直仁親王を中ハ給進歸花園院
第一御子直仁親王擬先嚴院宣皇太子觀
應二度之出家云 東宮武負令新解子
詔東宮太子之所居也云 尊解之秋云太
子詔之東宮也 詔云東宮詔表子宮朱云
太子之宮稱東宮也 云御子宮在御所東
故云東宮也 伴云時氣自東發即春

官職難辨と云云
觀應の大亂の南方へ
云云

准此故為東宮者宮其新无別也其官
 職難取其あはの次高即位はけるものも
 若宮より中其さすし立坊節會とて節を
 さしと定するし押へ若宮とてやとんあ
 代の皇子も又少力も又他の御流も
 時よりとし其御御事も持つて
 之皇太子と中し少力の時皇太子と
 中さすも皇子と中する例も勿論に東
 宮者太子のしる御事そののた
 する差別あり侍皇太子侍あり 學士東宮

經射記七年十一月 上春宮言元也
ノミ 東宮ノミ 敏原記元年
ケ 東宮ノミ 月明記元年
ト 東宮ノミ 東宮ノミ 侍ノミ
 持流記二 經射東宮ノミ

太子御節氣也紀傳 げ二は必東宮を同也大
 の傳よりなる 夫亮直以下皆若宮のなる侍 若宮侍と云ふは故實
一 卷有職云枝新野同若 職存抄下 東宮者
二 卷の後に云ふなり 宮是也此 而侍學士此為東宮宮大夫
 以下為訪宮古来如斯 其百卷訓要別
 注卷の末宮上八宮太子ノ御事ニ皇子ノ内東
 宮ニ立スルベキ定スル先儲君ト云アリテ
 他ノ皇子トハ殊ナル御儀ニ 其後東宮ノ宣下アリ
 テ別殿へ侍中奉見皇ヲ立坊ト云云和名

イヤノオナキカビギキキ、春宮
大丈、コノイヤノツギカカシ
古今、下、コノオノナラハ
ま、何、コノオノナラハ
ま、何、コノオノナラハ
ま、何、コノオノナラハ
ま、何、コノオノナラハ
ま、何、コノオノナラハ
ま、何、コノオノナラハ

抄 此の巻、坊職負令云者宮坊 義台乃夏
佐云、職名部、春宮坊、職曹司と、東宮雅院
と、二前坊と、いふこと、大内衰考證 廿七上 諸
證を引て、いふ、事、前坊、西前坊と、あり、
圓子、延長年中、保明、度、頼の、兩親王、仲、身、世
目、不、吉の、例、な、し、と、廢、此、車、前、坊、の、
代、官、官、官、官、有、職、同、春、三、の、子、崇、克、院
貞和年中、直仁親王 花園院、春宮、後
三坊、儀、式、絶、毛、舒、瞻、碩、人、尊、子、東
宮之、妹、三、傳 注疏三、子、東、宮、承、天、子、也、云

疏、正統、皇太子、居、東宮、因、以、東宮、表、大
子、故、左傳、曰、娶、於、東宮、得、臣、之、妹、服、虔、云、
得、臣、世、子、名、居、東、宮、是、也、云、左、傳、疏
本、三、上、衛、莊、公、娶、于、齊、東、宮、得、臣、之、妹、
同、莊、姜、云、註、云、大、子、不、敢、居、正、位、故、知、東
宮、系、疏、云、得、臣、為、大、子、云、常、處、東、宮、者、
四、時、東、為、春、萬、物、生、長、在、東、西、為、秋、萬
物、成、就、在、西、以、此、居、在、西、宮、大、子、常、處、東
宮、也、或、可、據、易、象、西、北、為、乾、乾、為、居、也、
故、居、在、西、東、方、震、為、長、男、故、大、子、在、東、

皇公
九年日移善光
宮松原皇子太子意也

自觀政要二の卷
入者宮注子末宮也武徳
九年六月太子初為皇
太子云

也云呂氏春秋卷
問於田賦曰寡人之在
駿徑本廿二の卷
注之者宮末方青帝
仁 一の卷
下卷同移王
九年の事
公羊
各同

継躰 三丁象

史記外戚世家子自古受命帝及
文之君云宗隱曰継體謂非創業之主
而是嫡子継先帝之正體而立者也云
文選六臣注本 張衡西京賦高祖創業
継體承基云注云善曰漢書平當曰今
侯継體承基三百餘年云翰曰高祖
創業雖整之勞乃太子孫継躰以承其
基也云公羊傳三の卷 継文王之體
宗文王之法度云け外漢書郊祀志下同

平當侍文選 六臣道 左思吳都賦 七 字面 八 日本紀 九 卷二 十 男大造 十一 天皇の漢 十二 標の御識 十三 を継繼と 十四 中 十五 七 十六 せん 十七 三丁裏

藤原前防直仁親王 十八 御遺錄 十九 藤原 二十 藤原 二十一 藤原 二十二 藤原 二十三 藤原 二十四 藤原 二十五 藤原 二十六 藤原 二十七 藤原 二十八 藤原 二十九 藤原 三十 藤原 三十一 藤原 三十二 藤原 三十三 藤原 三十四 藤原 三十五 藤原 三十六 藤原 三十七 藤原 三十八 藤原 三十九 藤原 四十 藤原 四十一 藤原 四十二 藤原 四十三 藤原 四十四 藤原 四十五 藤原 四十六 藤原 四十七 藤原 四十八 藤原 四十九 藤原 五十 藤原 五十一 藤原 五十二 藤原 五十三 藤原 五十四 藤原 五十五 藤原 五十六 藤原 五十七 藤原 五十八 藤原 五十九 藤原 六十 藤原 六十一 藤原 六十二 藤原 六十三 藤原 六十四 藤原 六十五 藤原 六十六 藤原 六十七 藤原 六十八 藤原 六十九 藤原 七十 藤原 七十一 藤原 七十二 藤原 七十三 藤原 七十四 藤原 七十五 藤原 七十六 藤原 七十七 藤原 七十八 藤原 七十九 藤原 八十 藤原 八十一 藤原 八十二 藤原 八十三 藤原 八十四 藤原 八十五 藤原 八十六 藤原 八十七 藤原 八十八 藤原 八十九 藤原 九十 藤原 九十一 藤原 九十二 藤原 九十三 藤原 九十四 藤原 九十五 藤原 九十六 藤原 九十七 藤原 九十八 藤原 九十九 藤原 一百 藤原

九

藤原 一 藤原 二 藤原 三 藤原 四 藤原 五 藤原 六 藤原 七 藤原 八 藤原 九 藤原 十 藤原 十一 藤原 十二 藤原 十三 藤原 十四 藤原 十五 藤原 十六 藤原 十七 藤原 十八 藤原 十九 藤原 二十 藤原 二十一 藤原 二十二 藤原 二十三 藤原 二十四 藤原 二十五 藤原 二十六 藤原 二十七 藤原 二十八 藤原 二十九 藤原 三十 藤原 三十一 藤原 三十二 藤原 三十三 藤原 三十四 藤原 三十五 藤原 三十六 藤原 三十七 藤原 三十八 藤原 三十九 藤原 四十 藤原 四十一 藤原 四十二 藤原 四十三 藤原 四十四 藤原 四十五 藤原 四十六 藤原 四十七 藤原 四十八 藤原 四十九 藤原 五十 藤原 五十一 藤原 五十二 藤原 五十三 藤原 五十四 藤原 五十五 藤原 五十六 藤原 五十七 藤原 五十八 藤原 五十九 藤原 六十 藤原 六十一 藤原 六十二 藤原 六十三 藤原 六十四 藤原 六十五 藤原 六十六 藤原 六十七 藤原 六十八 藤原 六十九 藤原 七十 藤原 七十一 藤原 七十二 藤原 七十三 藤原 七十四 藤原 七十五 藤原 七十六 藤原 七十七 藤原 七十八 藤原 七十九 藤原 八十 藤原 八十一 藤原 八十二 藤原 八十三 藤原 八十四 藤原 八十五 藤原 八十六 藤原 八十七 藤原 八十八 藤原 八十九 藤原 九十 藤原 九十一 藤原 九十二 藤原 九十三 藤原 九十四 藤原 九十五 藤原 九十六 藤原 九十七 藤原 九十八 藤原 九十九 藤原 一百 藤原

官職難辨 一 末言 二 崇光院 三 の所 四 直仁 五 親王 六 藤原 七 藤原 八 藤原 九 藤原 十 藤原 十一 藤原 十二 藤原 十三 藤原 十四 藤原 十五 藤原 十六 藤原 十七 藤原 十八 藤原 十九 藤原 二十 藤原 二十一 藤原 二十二 藤原 二十三 藤原 二十四 藤原 二十五 藤原 二十六 藤原 二十七 藤原 二十八 藤原 二十九 藤原 三十 藤原 三十一 藤原 三十二 藤原 三十三 藤原 三十四 藤原 三十五 藤原 三十六 藤原 三十七 藤原 三十八 藤原 三十九 藤原 四十 藤原 四十一 藤原 四十二 藤原 四十三 藤原 四十四 藤原 四十五 藤原 四十六 藤原 四十七 藤原 四十八 藤原 四十九 藤原 五十 藤原 五十一 藤原 五十二 藤原 五十三 藤原 五十四 藤原 五十五 藤原 五十六 藤原 五十七 藤原 五十八 藤原 五十九 藤原 六十 藤原 六十一 藤原 六十二 藤原 六十三 藤原 六十四 藤原 六十五 藤原 六十六 藤原 六十七 藤原 六十八 藤原 六十九 藤原 七十 藤原 七十一 藤原 七十二 藤原 七十三 藤原 七十四 藤原 七十五 藤原 七十六 藤原 七十七 藤原 七十八 藤原 七十九 藤原 八十 藤原 八十一 藤原 八十二 藤原 八十三 藤原 八十四 藤原 八十五 藤原 八十六 藤原 八十七 藤原 八十八 藤原 八十九 藤原 九十 藤原 九十一 藤原 九十二 藤原 九十三 藤原 九十四 藤原 九十五 藤原 九十六 藤原 九十七 藤原 九十八 藤原 九十九 藤原 一百 藤原

子前坊内名有嫡好茂撰云云紹輝
要略云保明親王云世以前坊云拾
芥坊中末諸院部子雅院或御書司東
宮坊内東前坊中御門北匣東保明慶賴
御此所西前坊中御門北匣西云東中館
情書子前坊云云中末拾長
中下云宣積類書人部二恩勅故祥同祥
一之坊と大一一と云此射語退云云
子ハ醍醐の以ハ東宮文彦太子保亮後其子
慶賴云云坊又字也其後朱耆院之坊也云云

孫軍 四丁表

皇利新滿御軍之皇利家官位記子慶茂
院殿新滿延文三年八月廿二日御誕生云云應
安元年三月廿日補征夷大將軍云云應
永元年七月廿七日辭征夷大將軍讓任御
息同廿廿日任太政大臣云云同二年二月三日
辭相因同廿日御落飾廿八歲御法名道者但
後日被改道新御名
天云同十五年四月六日所回家一歳号鹿
苑院殿云云大日本史御軍傳八の巻子云云

征夷大將軍 征夷大將軍一人 征夷者始於日本
武尊 每有兵事 遣將軍帥也 祖見葛
記云 恩柄於鎮府者 已有鎮府依之重
崇 將軍之日臨時 加征夷号 欲之權大
納言右近衛大納言賴朝 卿辭 兩職 帝
東國之後 有勅 被任征夷大將軍 南來
連綿 凡賴朝 卿補之後 依重征夷
之任 不任鎮府 元弘以來 被並任將軍
三光院殿 礼節 副將軍 子 凡將軍者 有朝

敵之時 為追討 一旦被補之候 尊氏依別
忠永代 可為將軍家之由 被仰出之後 競
望之者 也云 官職難 教之 征夷大將
軍 今將軍 は古は老を 是を 何ぞん 而
用のある時 降付の 宣下 せり 也云 又
云 將軍と 武名を ありし 是は 持物と 才
一と 云ひし 將軍の さふら 及ぶ こと げり
乙才一の かりし 持物 其の 辭 漸 將軍
系人 施 院 使 候 遣 使 遣 せ 老 友 家
城 使 候 ころ 持物 の ころ ころ 多 議 と

お軍とてお軍を移すも也假位使夫
大お軍年謝後位守在と精核中
お高の武家位若け分也

内才
四丁表

故寄指安老の讓位讓國退位遜位
脱讓是皆天子御位三種ノ神品其
信君へ譲り玉フ云也海人藻芥卷
二即位受禪讓國讓位時跡是受禪
讓云即位也代始和抄父子讓國の
時あり及父の命をそわく

依て新讓の手紙 云々は國わづらは
天下の言も世のつりあふるまじり此を
としおめんまの警固固同とあり
と云ら最前へ行もこも空穂物語
二國わづらひの云々云々

貞貞負 四丁表

海平盛衰記卷の白山神樂登山のみあり
大衰貞貞負セラハ訴訟争カ不達
同點興福寺牌状ノ所及貞貞負最
可相救也云々同卷の寛明詔山門あり

平家女穂ノ新リヲ改テ源氏 顯負ノ心
位セラレキ哉 太平記の卷十三 西園寺
公宗謀及の事子 是國軍顯負ノ厚恩
ナリキ 同卷 高野根来不和の事子 武
家ヲ顯負 矣 公家ヲ背キ云々 又此敵
山州開の事子 朝敵ヲ顯負セシニ其
テキ 同卷 佐々木通季流刑の事子 通
譽ヲ顯負セラレシニ同キ 庭訓往来
六月十一日 身授同意 顯負之徒 壹云々
又八月七日 内奏 顯負 親機 嫌可求之云々

注 諸抄大成の卷廿一 小カを以て 荷擔 以
義ノ為擔 以 其ニに 小カを以て 佐子 顯負
以るを 小カを以て 以る 小カを以て 下
学年 下卷 顯負 以る 著カ 扶人之象
キ 以 呂波字類抄 顯負 以る 顯負 以る
キ 又 小カヲオコシキ 顯負 以る 顯負 以る
負 以る 小カ 作カ 兒云々 显 步色 甚キ 显 以
顯負 以る 小カ 文選 顯負 以る 顯負 以る
显 賦子 巨 显 顯負 以る 显 顯負 以る
作カ 之 貌 也 又 显 显 顯負 以る 显 顯負 以る

Handwritten text on the right page, including a vertical title on the far right edge and several columns of cursive script.

競... 下卷... 七の巻計部... 競望... 是也... 競望... 是也... 競望... 是也...

又... 競望... 是也... 競望... 是也... 競望... 是也...

陽福門院

女院... 陽福門院... 當今母正二位... 大宰權師公秀女... 為典侍... 同日同年... 御事... 貴女抄... 陽福門院秀子... 光徽... 光隆...

嚴御母、公秀公女也、女院記、陽祿門院、
子、崇光後、嚴院母、顯天臣公秀女、文和
元、十一、廿八、崩、云々

閑素 卅丁哀

今世の刻意は篇の故、素也、
有、謂、其、意、之、難、也、と、有、
閑素の二義、一、平、と、い、ふ、

閑素、閑空、云々、閑静、寂寂、夢、の、ま、に、詩、魏、風、
注、本、上、代、檀、皇、傳、に、素、空、也、云々、廣、雅、秋、詠、
の、三、卷、
素、空、也、云々、論、衡、十二の卷、所謂、八、位、素、
准、者、也、素、者、空、也、空、虚、也、德、遠、人、之、祿、故、
曰、素、准、云々、品、字、箋、戊、年、素、又、猶、空、也、云々、
易、象、下、傳、左、傳、宣、公、十、二、年、傳、漢、書、楊、惲、傳、注、朱、雲、傳、注、
諸、葛、忠、傳、注、後、漢、書、陳、龜、傳、注、謝、弼、傳、注、尚、書、四、十二、
の、卷、

唯、尚、亦、恒、割、子、質、真、而、素、
樸、用、静、而、不、深、也、高、誘、注、
素、樸、精、不、散、也、用、静、言、無、欲、也、

禪 律の二戒師 卅丁哀

鹿苑院は臨濟派の禪宗、院主、帝、光、目、
師、は、律、の、信、り、る、禪、律、と、い、う、それ、
序、戒、師、を、所、受、戒、師、と、い、う、禪、律、の、序、

柳霞傳、有、十、子、請、糶、最、知、三、請、雅、序、
政、事、所、居、皆、有、治、術、是、氏、長、而、愛、之、也、性、
愛、閑、素、其、名、利、澹、如、也、云々、沈、約、反、台、
鳥、賦、云、倦、城、守、之、誼、疲、愛、郊、之、閑、素、
云々、以、是、法、字、類、抄、三、の、卷、加、部、二、用、素、カ、ン、ソ、云々、

節、用、身、加、部、言、二、用、素、カ、ン、ソ、云々、

百鍊抄 岸徳大治二
 結草鳥羽殿有田延興
 又同三五十一 西院 幸
 宮水岡有田延興

四世 表

戒師その先例しあやぶるごとし
 常花はぬれ 郡之表のきよ
 しるしては月よをぬ ちまふはつたふかり
 ちまば殿の序 最妙よぶゆゆし
 後やせんことあはれはゆのほや
 のまをこの田の殿の少きしり せぶの
 まぶらるはるけはうづりしむし
 のゆかりしむし 田うせんり 例のあり
 ちまのりぞはるけはうづりしむし

後やせんことあはれはゆのほや
 のまをこの田の殿の少きしり せぶの
 まぶらるはるけはうづりしむし
 のゆかりしむし 田うせんり 例のあり
 ちまのりぞはるけはうづりしむし

づきんて女房もふがふかきうにすある
さうやうんじきいふかきうにすある
女ざみち十人ぞうの表袴とよめ
いとまうしやうの白きいざよさやう
がらめいざうはげしづあめけし
やもてはげふらたり田あうし
翁いもやまあまがうし大い
さうやう但ともいざだほまうし
やういざよめざうからわうさ
ふとよめあふさげ化粧こまわい

さうやう足大さうやう又田舎い
やまやうさう敷腰あつて
侍いざよめさうの舞あや
一のさうさういざうは
二十人ぞうあうその中いざう
もの例のいざういざう
とまうしやうあういざう
あうあういざういざう
位いざういざういざう
いざういざういざう

と云ふことありては、
の向せともてつていふらん又人

はとよまぬあつるなるあつるあつるあつる
まなりとあつていふ田舎の神といふこと
すさきいふ所既の司馬といふ事ありといふ
まがうやまをぢといふ事ありては、
うやうやあつるの事ありては、
興ある事ありては、
後布利本ま九巻ありては、
画詞の事ありては、
くくく伊勢の白木後院下ま、
学花の事ありては、

の事ありては、
新なる事ありては、
の事ありては、
まがうやまをぢといふ事ありては、
と云ふことありては、
かの田舎は海の家といふ事ありては、
いふ事ありては、
今も昔も海の家といふ事ありては、
同じ事ありては、
す及び、
西蔵回、
豊嶋

朝と新詮伴仰和陸多子御治せ御子ト
目衛ノ御保花ニ本家領家年来進
止ノ地ニ於テハ武家一向共イヒラ出ベシテ
候キ、愚記老の朝儀年中行幸多キ、四
目北国ノ宮方漸亡シカハ年中ノ百官万民
今ハ目衛庄園モ公家ノ御知行ニテ正税
官物モ厚匠ノ煩アラジト悦合ヘル也云々
なとあるハ、ウラウラキ、目衛は往古の目
府のちびりも公家御領の名にナリ、目領
と云ふ事、目領ハ地持と云ふ名目目

衛ノ御領ニ對スル名目ニ、
とらひなり、王海文治元年十一月院宣備
云々、至于目領者、任此状令遵行、庄園者
觸本所致、汝決交々、真言付老、覺鏡
上人傳多ノ目領、庄号ニハ、是ラ宮守
セラレ、
川武、武信、鈴、注、神領、目領、之界
也云々、
園トシテ庄園のまを本所トシテ、
よ公の御領、目衛目録トシテ、

江家次子 上の巻、公卿勅
下桶小
三内口訣、
堂上、
衆皆一同、
本所ト
稱候ト

始有...
皇極...
皇極...
皇極...

宋書武帝...
皇極...
皇極...
皇極...

者人君也...
以施教於民...
分職以考民極...
舉極中也...
其所上...
其然其宅...
神明其位...
者也...
天子居天...
通以敬守...
君中有...
皇極...

才...
皇極...
皇極...
皇極...

武帝...
皇極...
皇極...
皇極...

皇極...
皇極...
皇極...
皇極...

皇極...
皇極...
皇極...
皇極...

皇極...
皇極...
皇極...
皇極...

皇極...
皇極...
皇極...
皇極...

皇極...
皇極...
皇極...
皇極...

皇極...
皇極...
皇極...
皇極...

前坊の... 三丁裏

国衛 七丁表

有名を... 七丁裏

見たり... 有名元寶... 有名無寶... 有名の字... 易礼記...

回祿 所見考る上違ふ也

下字集 神祇も回祿火神名也故呼炎上

云回祿也系有識小説下回祿炎上其

云一王城ノ失火云回祿ト火神ノ名也

云一左傳昭公十一年子禳火于玄冥

運歩を... 祿多イ... 平記音... 回祿ク

抑火... 欲念火自止... 具餘災慮

巳也申祿信於聯隊注云
申祿大神鄭書云夫祿
為高神中火正以淳耀敷
大天明也德光昭四海
故命之曰祝融其

功大美帶年二十九
年在信曰火正焉
祝融又曰顓頊以有子
曰黎為祝融故太史公

抹取二符以為楚世其云
顓頊生稷稷生唐虞
唐生夏商伊為高

幸武火正其有功於元
融天下帝聖命曰祝
融其書亦作亂帝聖便會稷誅之不書帝乃以疾寅日誅稷而以其子

畢公為重黎後居火正為祝融
也以此考之則祝融之後有
稷而陸終為後復
居火正而為祝融則
前古以申祿配祝融
而考火神可以無疑
矣云

更火也云 國語卷一の周語上より夏之興也融
降崑崙其亡也 回祿信於聯隊注云
回祿火再命為信云云

唯后 周禮
是則祿滿將軍 其信也 註

唯后 唯二后の略 謂之官職難辨

唯三宮と大皇太后宮皇太子宮皇后宮の

三の唯はるるの字をみるに男又法中

の字をみるに理を以て女使也と負觀

十三身之忠仁公唯三后 年官年官封之

を於ては是の友壽封を以ては為り
年官年官と 年官の法ある様一人
目一人の法目 内官を於て叙位の叙壽
を一人の法を以ては叙位を以ては
事又法中の子を以て是の法を以ては
所息所を以ては法助とやらなり 少年儀以て
唯后を以ては法を以ては法を以ては
けたる例とあるに法を以ては法を以ては
之名を以ては法を以ては法を以ては
略しるるなり 有職同答 卷一の唯后

幸休辭法辭女房有之但清華と
希し此宮と任下り予の御事也其
成り答り親房卿於前朝宣下し當朝
不可用也于今准后上称来り異于他
ノ成り又卷の●唯三宮より此号法中
可限候大略所門路或は攝家清華の
高位の所方で被称り或は將軍家
補任の治世の同り被任候或は答り法
中不被蒙此宣告候清華其例希候
也不可限候庶几院殿毎予之様攝家

昇進の同始予念蒙此宣告給ひて海人
藤芥卷上ノ關中法助唯三宮事同白
法助初任之但母儀此唯后譲与て其
後信申任之例及西三人死而近日建徳
也唯三宮ハ太皇太后宮帝母皇太后宮
帝王 皇后宮 后妃 け三宮准之我朝中
宮職アリ仍回宮ト号スル也云々職空抄
云々巻ノ末ノ准三宮大臣者毎年信宮信宮
爵即升後上位下官乃掾若内官也如
三宮之儀云々卷ノ

有識の技類聚名物考、狩号本朝官
制沿革圖考、卷一の麻久奈岐、一則たよ親
たよ親、昔付抗事、卷一のよ親、誤誤、其
澄觴の三代實録、卷九貞觀十三年三月
十日、初大政大臣外祖父藤原朝臣、又
給帶仗質人三十人、年官准三宮事、亦
當、孝孝、皇皇、長長、遺遺、詔詔、三三、大大、鏡鏡、二二、のの、卷卷、良良、
二二、忠忠、仁仁、公公、とと、ちち、りり、しし、きき、いい、けけ、かか、いい、文文、徳徳、天皇天皇
の、をを、ちち、太太、宣宣、太后太后、明明、子子の、以以、父父、清清、和和、天皇天皇、のの、作作
祖、父父、をを、大大、政政、大臣大臣、准准、三三、宮宮、子子の、なな、らら、せせ、るる、年年

官年壽の宣旨、くく、りり、きき、澄澄、觴觴、抄抄、下下、子子、
准三宮、清清、和和、百百、年年、辛辛、卯卯、貞貞、觀觀、三三、月月、十十、日日、
丙戌、初初、授授、政政、大大、政政、大臣大臣、准准、三三、宮宮、賜賜、年年、官官、
封戸三千、内内、舎舎、人人、左左、右右、近近、衛衛、兵兵、衛衛、六六、人人、
隨身、兵兵、仗仗、質質、人人、四四、十十、人人、之之、給給、初初、例例、
抄、上上、卷卷、法法、親親、二二、法法、親親、大大、相相、目目、出家出家、後後、家家、准准、
三宮、之之、宣宣、旨旨、御御、宣宣、法法、助助、准准、三三、宮宮、之之、宣宣、旨旨、思思、
記、三三、月月、十十、日日、のの、宣宣、旨旨、准准、后后、三三、宮宮、之之、宣宣、旨旨、三三、宮宮、之之、宣宣、旨旨、
ひよ、しし、ここ、もも、

常磐井相国ニ表

常盤若相國は西園寺公純准后の子也
其母は實氏也 諸家傳 補仁 卷一 西園
寺系圖に實氏常盤井大政大臣と云ふ公
卿補任 建山院 又敬位藤實氏 十一
月三日出家 号は法名實室 文永六六七
薨 七十号 常盤井入道 尊年分
脉 九の巻藤子 西園寺大相國公純公男 西
園寺實氏 母中納言純保女 大政大臣從一
位 文應元 廿三出家 号は法名實室
之永六六七 薨 七十六号 常盤井入道 相國

云々 拾芥抄 中末 諸名所部に常盤若井
春日南条極 大政大臣實氏家と云ふ 堀
鏡 實氏の子 實氏は 實氏は 實氏は
井と云ふ 大極 中つ極 極と云ふ 實氏は
任と云ふ 相國に大政大臣の實氏は 職
原抄 大政大臣 實氏 大政大臣 相國太
尉と云ふ 孝漢以来有 相國左右丞相号
云々 事物紀原 實氏は 實氏は 實氏は
始皇帝 實氏は 實氏は 實氏は 實氏は
何亦為之 今人以呼 實氏は 實氏は 實氏は

志賀信正明物記がうしんまもあつても
人こけり或時の日の来ぬくまの船も
うづて安陸和名の物の人もあまも
富しはりまりナ訓抄下巻可危哉才能う
空子御堂岡白大井川三遊覧の時の詩
歌の船う分二各場能人々え能うしたて
四侍大納言う仰うして云いぞの船こらんベキヤ
公任卿和歌の船こらんベキトテラレリサテ
朝ニダキ嵐ノ山ノ寒クレバタルモシダラ
オヌ人ウダキ後ニラレルハ何レノ舟こらんベキゾ

ト仰うしたッノ心オトリセラレシカ又詩ノ舟こ
身テ是キドノ詩ウクリクラハ名アゲテ
コト後悔セラレリ此歌元山院拾遺集
ヲ撰ビセテフ時任筆ノミキトカテ入ベキ日
レ仰えしケレラシカハカラガルコシ申サレシバ奉
ノミニ入ニテリ又四歌院所時大井川
道途ノ時三舟ニ乗トモアリ又神氏
部卿信信卿又此人コトラガリテリ白
河院西川ニ行幸時詩歌管後三舟
ヲ流ニテ其在々ノ人々ヲ分チテセラレル也

信信卿、遠赤向、トノ外ニ、即ノ氣色
アシカリ、先、おと、よ、ガリ、マ、シ、テ、赤リ、ク、ル、
ガ、三、事、一、事、先、人、三、天、江、ヒ、サ、キ、キ、ヤ、ド、ノ
舟、カ、レ、セ、候、ヘ、ト、イ、ハ、シ、リ、ケ、ル、時、ニ、取、テ、イ、
ジ、カ、リ、ケ、リ、カ、ク、イ、ハ、シ、リ、ケ、ル、時、ニ、取、テ、イ、
コ、ソ、サ、テ、管、領、ノ、舟、カ、レ、テ、赤、ク、テ、取、テ、イ、
タ、リ、ケ、リ、三、ノ、舟、カ、レ、テ、赤、ク、テ、取、テ、イ、

准據 シテ 二丁表
以呂波字類抄 九の巻、志部 准據 シテ 二丁表

雨行幸、御連、雨、皮、事、
所、御、記、事、此、例、雖、雨、皮、九、
是、准、據、者、歟、

大樹 タイシツ 九丁表
たごふりし

足利新持お軍し、足利家官位記、晴定院
殿新持、至徳三年、兩二月十二日御誕生
應永元年十二月十七日叙正五位下、九同日
御元服、今日任左中將、禁色昇殿、補征
夷大將軍、三應永廿六年八月廿九日辞
内大臣、廿四同廿年三月十九日、以征夷大將軍
讓任御息所、同四月廿五日御出家、廿八同廿
五年正月十九日御出家、三同廿二日贈大政

大匠、号勝定院殿二の巻降氏、尊号分卿清和の流
子、兼通大將軍の男、兼持、内大臣、後一右大臣、
征夷大將軍、至徳三十二年、應永元、三十七
元服、任官、叙位同世、四廿、剃髮、法名通詮、
号勝定院、通号、鎮山大禪定門、贈大政大
臣一品、應永廿五、正十八、薨、四十三、七、諸家
傳補任、老、宣河殿の字、よ、く、何、く、こ、も、

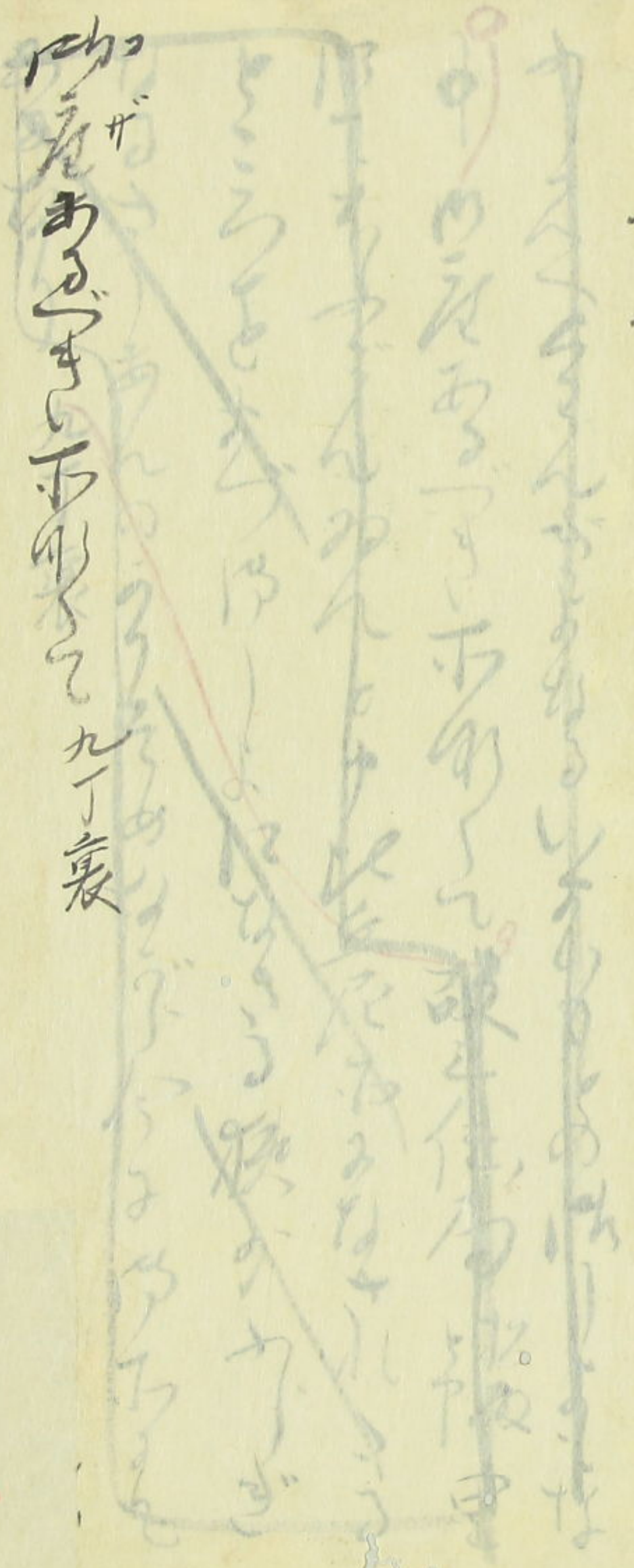
~~平長元年 正月十八日 薨 年三十七~~

~~院殿 通詮~~

○大樹は、~~征夷大將軍の存者~~、百寮訓蒙、
大樹、征夷大將軍、唐の名也、~~隋高祖大~~
將軍として、槐下、え、る、も、さ、ら、け、本、姓、
おと、い、は、れ、の、さ、し、し、召、伯、の、耳、奈、の、と、い、
大樹、將軍、と、い、ふ、も、鎌倉年中、行年、卷上
正月初日の、あり、京都、鎌倉、御、西、殿、天
子、為、御、代、官、諸、侍、忠、否、之、は、深、く、記、可、
有、御、政、務、職、三、つ、又、同、大、樹、と、申、也、

後漢書の卷十七馮異傳の異常棣の樹下軍中の馮異大樹の軍の及の破の耶の鄭の乃の更部の分の諸の有の配の隸の軍の之の皆の言の願の屬の大樹の軍の一の言の隋書の高の穎の付の子の穎の每の身の朝の堂の北の槐の樹の分の以の聽の事の其の樹の不の依の行の列の有の司の代の之の上の特の命の勿の去の以の示の後の人の其の見の重の如此の云の一の言の大樹の訓の法のはの有の識の同の答の本の禮の子の官の位の唐の名の讀のやののの子の唐の音の子の讀の也の大文字のとのいのまのいのまの六の文字のとのいのまのとのいのま

みのとあしとくろいじと大を清樹をいて
 認べ



松の皮の屑の書の類の後の守のとの松の皮の子のしのくの伏のんの皮の還の片のちのりのまの榮の仁の親の之ののの

て私を、西本の上を束まといふを初任といふ
清暑堂の神宴 ナリ表

中務内侍日記 ナナセ 清暑堂の所へ
時代のもとの心算をいふといふ君もさへ
も心算の事をもはやしなるといふ
その人の心算よりいふことさへいふ
皆ありぬ心算の心算末さへ
心算の事をもはやしなるといふ
心算の事をもはやしなるといふ
心算の事をもはやしなるといふ

中七あらうこそ代始和柄ののり
名をもやし田舎の心算もさへ
清暑堂の心算ありまへは心算末
名をもやし田舎の心算もさへ
心算の事をもはやしなるといふ
心算の事をもはやしなるといふ
心算の事をもはやしなるといふ
心算の事をもはやしなるといふ

ありて正安三年大蔵會記の清暑堂

諸家諸人神宮之日
 招き良黄被物
 不詳

御神宇を、指し左大内、中御門、亭相、
 守付歌、有時朝臣、冬定、和琴、筑鹿、大炊、
 御門大内言、良、由、有、別當、并、等、
 案、前、氏、部、卿、并、三、清、署、堂、非、宮、の、
 可、負、觀、傲、可、四の巻、降、下、大、章、守、儀、下、西、宮、記、一、時
 北、山、抄、上、の、は、家、以、弟、十、五、の、巻、下、の、巻、、管、見、記、六、の、
 章、會、禮、儀、類、二、の、巻、上、の、巻、、大、章、會、上、、七、の、巻、、外、也、
 枚、考、上、道、り、、清、署、堂、中、五、の、巻、、豐、學、殿、後、房、
 之、拾、芥、中、五、の、巻、、大、内、京、老、院、四、の、、巻、、よ、り、
 〇神宮の事、三、の、巻、十、、三、の、巻、十、、三、の、巻、十、、三、の、巻、十、

豊學殿の後房、清署
 堂の一名、よここ、則、テ

〇神宮は、御神宇の後宮、三代實録 三の巻十
 顯觀元年十一月十七日の事、大章會禮記、
 是夜、天皇留、豐學殿後房、文武百官侍
 宿、親王已下、侍御在所、琴歌神宮、終祀、
 歡樂、賜所衣、清署堂の神宮、
 又 三の巻、負觀八年、正月廿三日、禁、断、
 諸家諸人、被除神宮之日、諸衛所、各人及
 放、徒、之、輩、求、酒、食、責、被、物、并、同、前、起、請、
 備、諸家諸人、至、于、六月、三、日、、五、日、、有、、被、除、、神、
 宴、事、一、、結、歌、、醉、舞、、欣、悦、、神、靈、、而、、諸、衛、所、

ミヤケ
心倉神男女小男
童神宮者まなり
と神事の宮神家
ととろふかなり

吾人并放能之輩、不務、主招、好備、廣任、優、
幕、争、入、院、門、自、錄、初、未、之、時、似、意、酒、食、
臨、不、端、却、更、責、被、物、其、本、不、始、念、詔、嘗、
厚、或、亦、託、神、言、吐、唱、主、人、如、是、遺、德、遂、
第、維、新、推、彼、意、况、不、異、群、盜、家、貴、之、
家、尚、在、相、輝、何、況、於、無、勢、在、台、之、輩、哉、
是、而、不、死、何、云、國、憲、豈、結、嚴、仰、所、司、
一、切、禁、遏、者、乎、
廿六の卷九丁表貞親十 江家次
廿六の卷九丁表貞親十 江家次
茅十の卷五 賀茂臨時 茅子 入衣 神瑞
系有 神宮 事云 丁表 神宮 御表
末云 元云 貞云 外宮 慶云 慶云 慶云 慶云 慶云

貞成 二丁表

後崇光院

詔の作者

後花園院諱彦仁應永廿六
六十六降 院實 後崇光院 弟
一皇子實 院政 門院 贈左 文
臣源 恒有 女三
高年 分所 原氏 二子 弟老 院
御子 弟仁 親王 御子 後崇光院
貞成 應永 廿二 四十六 親王 上同
七日 出家 安四 廿七 太上 皇尊
尊号 康正 二十八 九崩

皇年代略記、後花園院諱彦仁、後崇
光貞成親王御子、母教政門院入道贈左
大臣中納言有女、弟仁親王孫、崇光院嘗
孫、依上皇无继嗣也、歷代皇記、後
花園院諱彦仁、後小松院御子、實、後崇

光院御子云々、康正二年丙子八月廿九日太上天
 皇之册奉_レ上_レ号_レ後宗光院云々、康富記、文安四年
 上_レ月_{廿七日}是日太上天皇尊号宣下也、被授_レ
 申_レ於伏見殿、今上親親入道入_レ衣_レ被_レ行_レ
 詔書、事_レ云々、皇和真佑通_{廿五日}後花園
 天皇諱、彦仁、崇光帝曾孫、崇光帝生、大
 通院、崇仁、崇仁生、在品親王、貞成、貞成生、天
 皇云々、文安四年、尊_レ皇_レ又_レ入_レ道_レ道_レ欽_レ為_レ太
 皇_レ老_レ院_レ孫_レ云々、康正二年、秋八月太上天
 欽_レ崩_レ、今上實父貞成、法名道欽云々、女子_レ後宗光院
 百_レ首_レ和_レ款_レ、同_レ承_レ享_レ也、九月御百首、廿日侍

貞成

此類の作者、後宗光院の御子、

襦袢の詳、ナニ表

倭名抄、ナニの巻子孫、恒_レ可_レ襦_レ保_二音_一保_二小_一
 児_レ被_レ也、和名_レ色_レ豆_レ岐_レ云々、新撰字鏡、部子
 襦_レ方_レ老_レ及_レ上_レ毛_レ豆_レ支_レ云々、襦_レ九_レ合_レ及_レ上_レ末_レ小_レ虎_レ
 苧_レ帶_レ、須_レ支_レ云々、女_レ子_レ毛_レ豆_レ支_レハハハ年_レと_レ似_レ、毛_レ年_レの
通言、_レ和_レと_レ豆_レ支_レト_レ似_レ、類聚名辭抄、法_レ中_レ系_レ部_レ子

綴緋上居雨及ツラヌ下音保ムツキニオ
同表部子襪ヒムツキ又チゴギ又云襪襪
御音保二音ハツキ又ヌキ下ムツキ又チノ
キヌニ
あまのこ 綴緋ハヒモツキ
のまをえ 綴緋の新
丑の老无子襪襪ムツキ小虎被也チ一塵添
部籠物門
堪裳抄魁よ綴緋ハ小虎便利ヲウケキ
物欲帝ニサソノ思ヒサラニ
死ハ 漢書四第ハ詔李奇曰綴緋也以絹布
為之絡負小虎ハ 孟康云襪小虎被也云是
小虎ヲウケオヒアリクベキ物也便宜不濟ノ物

ヲモ拭取リナドスルヲソニ古今六帖卷一の月
の衣よ

そまのぬき
のちうま
子のみたる人よ
綴大輔

あ代のま
穂藏用
以ク
今
つる
大
字

念思得一卷 ナ七 五
亦不取障礙 ナ七 五
身所故 ナ七 五

傳玉節、手他字類抄、新韻集、
名サフルサハルトツホ
ルトツムカヒを訓り、
由諸根不壞作意現前時同類生異類
生無障礙不極遠云、
四種一非復障所礙二非隱障所礙
三非暎障所礙四非惑障所礙云、
藏法教 七の卷廿二 障、
如主剛徑中須善提得、
此二障故也、
謂見思二惑起種々昏煩之法、
心神

以致障礙在漏法性、
謂由根本無明之惑覆蔽法性而於中
通種智則成障礙故名智礙、
文身 廿四 春日顯、
在障礙不知高下、
負外 廿四 表

一本負外 廿四 表
世の人 廿四 表
廿三の卷 廿四 表
和漢 廿四 表
淨氏明石 廿四 表

かぶるはるの程の初よりなりなまもく續せ
継^{此の卷廿}丁表^餅大乃ささるもよるかびのぬの大
初よりささるりかむるもよる百寮訓要よりか
のぬの内玉^内大玉もささるるもよる

義隆 二丁表

足利家官位記より長得院殿新量公應永十
四年訂年三月朔日御誕生同廿四年十二
月朔日御元服加冠文公^{十一}歳叙正五位下
同日任左近衛中将兼左宣下同月十三日
昇殿今日初院参同日讀書始同廿年

三月十日任征夷大將軍 受文讓于同廿
一歳十七歳

一年正月十三日叙從四位下同年十月十

三日任参議同廿二年二月廿七日薨^{十九}

号長得院殿通基^{二の卷源氏}等山大臣左

大臣從一位^{清和の流}尊号分脉子足

利義持異義隆母從二弟子参議左中

將征夷大將軍号長從院法名通基通

号^一等山大臣左大臣從一位永廿二二

廿七薨十九九三

他河 勅撰 十三丁表

後醍醐院牙皇子母通陽門院

仙洞後小松院より、諱幹仁治世卅年、
永和三六廿六降誕、永徳二、四十一受禪、同年
十二廿八即位、應永十九、廿九禪位、永享三三
廿四御出家、法諱、素行智、同四十九、廿七崩、若
秋廿十七、うけり、大日本史、同七十三、子、
云々、

○仙洞は海人降芥、卷下、仙洞上、尊号蒙
ラセ給テ後申ス也、未ダ宣下ナキ時に院
ト申ス、大上天皇ノ宣下ヲバ、尊号ト、
申ス也、

故實拾遺卷一の、大上天皇、大上帝院、上皇、
仙洞、仙院、是皆天子御位ヲ新帝ハ譲リ去ヒテ、
下居ノ居テ思存ル也云々、昔傳拾遺卷一の、
所位を以てせり、新院と申、その号を、
大上天皇の号をも蒙るも、仙洞と申、
仙院あり、法皇と申、世部乾
二、仙洞、象、仙家、云々、厚徳年、院部、
云々の、仙洞と申、あのみは、仙洞、
のほ、仙洞、み、のほ、同、
云々、
後、籍子、仙洞、
范成、大上元、仙、
吳中、節、物、翁、仙、

逆辯 ナニ丁表

都洞 雪爰七籤子 仙都山洞名 なる字面を云へ三十二洞天
能得物 物志一 なる位処の洞の永くある事を取
て祝辭 イハヒ する名目し

海人澤芥 卷上 逆辯ハ帝王ニ限テ云フニ
服立身為人ノ事也 故實指老子卷六
ノ勅勅 逆辯 殿襟 辰襟 是勅勅天子
ノ勅勅氣ヲ蒙ルル云 逆辯ハ乃然ノ事也
殿襟 辰襟ノ二ハ御苦勞 被思ふノ事也
昔侍指要 卷一 の天子乃服立を逆辯ト云

三記音義 下卷卅二丁表
逆辯 ナニ丁表

計部言 子 逆辯 ナニ丁表
可辨 テ 而辨也 然 且候下有逆辯 徑尺
若人有學之者 則教人 人主亦有逆
辨 統者能 名 學人主之逆辨 則幾
矣 云々 史記 韓非 付 レ 以 説 レ あり 後漢
書 李雲 付 レ 今 日 殺 害 臣 忠 割 レ 之 讖
履 謙 於 世 矣 故 敢 觸 龍 舞 冒 昧 以 請
云 注 韓子 を 引 レ 云

貞觀政要 二の卷 求 諫 篇 ノ 龍 可
援 而 別 レ 唯 下 有 逆 辯 云

廿四 三 の み ナニ丁表

行光院の
應永廿四年

内府
十三表

勝定院義持御事 利家御事 信託御事 勝

定院殿義持御事 三年 丙二月三日御

誕生同日御事 在申御事 御事 御事 御事 御事

夷大打軍 同十六年七月廿三日任内大

臣大元 同廿六年八月廿九日任内大臣

歲同廿年三月十一日任夷大打軍 讓任

御息同廿月廿五日出家 同廿年

月廿日御圓寂 三歲同廿二日贈大政

應永元年三月廿日叙
五位下歲同 元服今

應永院殿 尊卑分脈

○内府は、拾芥抄中末 唐名部信位 内大臣

内府内相府内丞相名門 大内大臣

子内府唐名 攝壞集下卷 唐名部

唐名子内大臣内府 運歩色集

那子内大臣唐名内府相府相国丞相僕

射蓬府槐門左大臣右大臣内大臣也

曰三公三台三槐也大塚嘉樹 百奉訓

要別注卷一内大臣相部下 内大臣正位

二位上近位後一位入内大臣下下 内大臣

唐名多不トクハトモ左右大臣ニ擬テ内府ト
稱スル也ト云々ト云々ト云々ト唐名といふは誤
シ漢土の官名子内府ナリ 周礼後漢書鹽鉄
論の云子内府ト云々ト外府ト云々ト名目モ
異シヤ内大臣は拾号抄中末公卿選簡部ト
左右内大臣孝徳天皇大化元年以阿閉倉
橋麻呂為左大臣以蘇我山田石川丸為右大
臣以大織冠上中臣鎌子連為内臣天智
天皇八年有日吉口以大織冠鎌子為内大
臣云々百寮訓要抄子内大臣内府内相府ト

子任人大略右大臣ト同是ハ合字ト云々ト云々
也ト云々ト大織冠始テ任ズル令子ト云々ト
云々合外ガの官ト云々ト云々ト云々ト云々ト
の云々ト内大臣ト云々ト云々ト云々ト職原抄上卷
鏡ノ子孝徳天皇御宇以中臣鎌子連始為
内臣天智朝肇為内大臣賜藤原朝
臣姓此時其位在左右大臣上其後此官
久絶至光仁御宇藤原良継實名等
任之初次左右大臣之下凡内大臣者合外
之官也又有大政大臣之所任内大臣頗似

無其識云々官職難辨云々内大臣のあり
けり云々左右大臣のあり云々左右大臣のあり
あは内大臣のあり云々天智天皇御
宇大織冠始て所持也云々所云云位
左右のあり云々云々云々云々云々
けり云々云々云々云々文武天皇御宇官
位も定まり云々内大臣のあり云々
云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々左右内とナセ他云々云々
位のあり云々云々位を云々云々官
次宣下と云々云々云々云々云々
乃一け宣下云々云々云々云々位
階のあり云々云々云々云々始正
誤二の巻云々今内大臣ノ始ハ續日本紀云
仁天皇宝亀十年正月壬寅朔以忠臣
從二位藤原朝臣実名爲内大臣云々此
今内大臣ノ始也云々云々官職秘抄大政言
澄藤抄上云々云々云々云々云々歌

よは高大夫實多の百寮和歌の内大臣
かぢりちいといとく人やるあふの内のあとの
そどらんしりん又思の位夫木抄かぢりちい
後成長秋詠亭下家隆玉字集上二首統指遺賀新千
載度明新指遺雜上同中新續古今雜下夫木抄雜十七
ひんちんちんちん速水見聞私記一の兼知説
二影藤の三台豆のうげぢぢくし三公も三台の
星まよとくうう又内大臣の三台の歎の外や人や
ぢぢ三台の好位一なる官し故うげぢぢく星
とよまき左右大臣内大臣と三大臣と称した
イ有識問答四のまてえ

逐電ナ三
丁裏

以呂波字類抄二の巻知逐電ナ三云々
下字集徳藝逐電ナ三日本依世語暗跡
兼也云々知用身知言子逐電ナ三味跡
出奔ナ三逐電ナ三知子逐電ナ三ナ三
逐電ナ三明日記負取二年二子慈賢其夜逐
電ナ三居近に目而済奇云書善鏡一の巻四子
庸常以下七年瑞宗御旅館申合戦次
兼及秀兼逐電ナ三紙郵放火号事云々
ナ三の巻五 豫州逐電ナ三之後云々 四光大師

大平記音我 下巻十子逐
電ナ三云々

三の巻五 豫州逐電ナ三

續詞傳卷一の^一子^二定明^三遂^四電^五一^六也^七也^八也^九也^{一〇}也^{一一}也^{一二}也^{一三}也^{一四}也^{一五}也^{一六}也^{一七}也^{一八}也^{一九}也^{二〇}也^{二一}也^{二二}也^{二三}也^{二四}也^{二五}也^{二六}也^{二七}也^{二八}也^{二九}也^{三〇}也^{三一}也^{三二}也^{三三}也^{三四}也^{三五}也^{三六}也^{三七}也^{三八}也^{三九}也^{四〇}也^{四一}也^{四二}也^{四三}也^{四四}也^{四五}也^{四六}也^{四七}也^{四八}也^{四九}也^{五〇}也^{五一}也^{五二}也^{五三}也^{五四}也^{五五}也^{五六}也^{五七}也^{五八}也^{五九}也^{六〇}也^{六一}也^{六二}也^{六三}也^{六四}也^{六五}也^{六六}也^{六七}也^{六八}也^{六九}也^{七〇}也^{七一}也^{七二}也^{七三}也^{七四}也^{七五}也^{七六}也^{七七}也^{七八}也^{七九}也^{八〇}也^{八一}也^{八二}也^{八三}也^{八四}也^{八五}也^{八六}也^{八七}也^{八八}也^{八九}也^{九〇}也^{九一}也^{九二}也^{九三}也^{九四}也^{九五}也^{九六}也^{九七}也^{九八}也^{九九}也^{一〇〇}也

宮内省 古丁表

後花園院^一 紹厚^二 録子^三 芳百三^四 後花
 園院^五 諱^六 彦仁^七 治三十三^八 母^九 克範^{一〇} 門院^{一一}
 實母^{一二} 敷政^{一三} 門院^{一四} 贈^{一五} 左大臣^{一六} 隆^{一七} 臣^{一八} 有^{一九} 女^{二〇} 應
 永^{二一} 廿六^{二二} 廿六^{二三} 降^{二四} 誕^{二五} 實後崇光第一皇子 祿子 祿光院前
御後依元皇孫為神子
 正^{二六} 長元^{二七} 七^{二八} 廿八^{二九} 踐^{三〇} 跡^{三一} 永^{三二} 享元^{三三} 十三^{三四} 廿七^{三五} 卽^{三六} 位
 亨^{三七} 寬正^{三八} 五^{三九} 七十九^{四〇} 禪^{四一} 位^{四二} 尊^{四三} 号^{四四} 亨^{四五} 應仁^{四六} 元年
 九^{四七} 廿^{四八} 俄^{四九} 手^{五〇} 金^{五一} 切^{五二} 御^{五三} 本^{五四} 鳥^{五五} 流^{五六} 御^{五七} 出家^{五八} 法^{五九} 諱^{六〇}
 田^{六一} 隔^{六二} 智^{六三} 御^{六四} 戒^{六五} 所^{六六} 增^{六七} 進^{六八} 僧^{六九} 正^{七〇} 云^{七一} 文明^{七二} 三十
 二^{七三} 廿七^{七四} 崩^{七五} 於^{七六} 宣^{七七} 所^{七八} 亨^{七九} 泉^{八〇} 殿^{八一} 二十^{八二} 始^{八三} 奉^{八四} 号^{八五}

後文德院後改後花園院云々、皇身代略
 記、後花園院諱彦仁後小松院等二
 皇子實後崇光貞成御子母敷政門
 院入道贈左大臣中納言有女榮仁親
 王孫崇光院曾孫依上皇元健嗣也、在
 位廿六年、應永廿六年己未六月十日誕生、
 正長元年七月廿日踐跡若御門高倉
 云々、永享元年十二月廿七日己未即位大政
 寬正五年七月十九日禊位於第一皇子云々
 應仁九年九月廿日俄御出家戒所、增運、信正、實相院、隨、便、具

被_レ宣_レ之_レ法_レ諱_レ相 文明二年三月廿七日俄御愷
滿智回併統 頓前堂町第五十二仙洞 同三年正月三日
 孝養于悲田院泉涌寺依 始奉_レ後文德
 院後為花園院云々、歷代皇記如是院年
 代記新撰和漢合而下、本朝經号雜記、
 云々

御_レ察_レ了_レ白

庭田三位重有卿女、女房官等、御_レ按_レ察
 使_レ多_レん_レの_レ由_レ、_レと_レ是_レ等_レ上_レ觸_レの_レ能_レ在_レ也、
 け_レも_レし_レあ_レが_レち_レも_レい_レま_レう_レん_レわ_レる_レさ_レが

故實拾要卷之九 按察ノ号
八院中ノ女房ノ号ハ天子御在位ノ時至内
侍以上天子去御位為上皇後又如初奉
事ハ上皇女房ニ是ヲ謂フ按察ノ常例也
禁秘抄下卷女房ノ字ノ新院御所替三位按察
三位兼為三位不入夜御殿不取劔室也是
信如故也
信如故也云々
續日本紀卷之九
三年七月庚子ノ字ノ始置按察使在行
勢國守從上位上門部王管伊賀志摩二

國遠に國守正位上大伴者稱山守管
駿河伊豆甲斐三國中其所管國司若
有罪違及侵逼百姓則按察使親自
巡看量狀照防其後最以下漸決流罪
以上錄狀奏上若有聲教條備部内
肅清具記善最言上官職秘抄
上卷
對考識氣兼按察使例下卷
使の按察使合外大納言可兼之或及中
納言對考識氣兼按察使例見于考識所云百
寮訓要抄下卷按察使存陸奥

以信波字類抄官職門下
 按察使房の長
 共三年の如置の節
 因身の御言の按察使
 又七の御言の進歩の色
 學年の御言の按察使の七の色
 唐名都護の

出羽大國之長官、以兩國を殊更年級
 以る也。按察使陸奥出羽も各領の職
 也。大中功之可然人、氣子なる中、古以來、
 國の成敗、以て陸奥出羽を以て、
 ありし也。云々、職存抄下、陸奥出羽、
 按察使、相當位下、近代納言
 已上兼之、元正天皇、養元二、
 按察使、陸奥出羽、
 年、
 後改為、採防、
 治於所部之大郡、

既又改、為觀察、其有、我旅之地、
 度使、
 ○産有卿、
 二年の、
 七日、
 也、
 日出家、七月廿日、
 位、
 位、

杜氏通典之類考考を傳

後花園院

永享十

正三位、上十同、廿、權中納言、上十同
三六廿七、權大納言、上十同、日出家同也
月廿日、薨、上十同、後、小路、上十同、
大臣、同、上十同、

い、上十同、
已次、已次、の、字、音、西宮記、下、正月、廿日、叙、位、
名、表、上十同、曰、傳、大納言、説、云、若、謙、所、上十同、
一、大臣、入、角、南、以、次、大臣、以下、入、自、良、角、
雖、以、次、大臣、執、筆、之、時、權、可、入、自、良、
又、若、御、前、曰、座、之、時、以、次、大臣、執、筆、者、

連行故實抄、
子大臣紀之時、已次、
臣進、之後、已次、復、座、
記、也、三、

猶先、若、自、座、之後、隨、所、氣、色、可、若、上、座、
欲、上、二、水、記、大、永、二、正、二、淵、辭、の、字、下、
貫、首、勸、進、身、一、若、第一、大臣、之、外、取、
此、之、款、已、次、之、大臣、
市、の、日記、
と、
又、
此、山、
衣、
又、

管領 十五丁表

又三好氏はわいしし、のちをぞかき
又内をくけのるじゆ中いししとけい
あいしをんし、の湯石上記 永禄五 十六の年 今日
いけ初務じあり、中の中いしし、の湯石上記
づきわぬいし、いれく、いれいしし、いしし、いしし
三、以次の字面、讀書、教、存、通、信、同、納、充、同、
信、後、漢、書、苟、存、信、な、と、い、し、倭、漢、の、あ、る、枚

此時管領、斯波義隆、之、尊、年、を、脈、二、の

義隆左兵衛佐治部大輔正三 一、三、一、二、
三、男、義隆、治部大輔、字、世、三、斯波三尚
二、尾、張、守、高、恒、三、子、治部大夫、義隆、義隆
羽軍、管領、三、三、子、斯波左兵衛督、義
重 三、三、三、 法名、通、孝、三、三、子、右兵衛督、義
隆 三、三、三、 永享元年、月、再、管領、三、三、三、
大日記、小、應、永、三、三、管領、斯波右兵衛督、通
孝、入、通、佑、名、義、重、三、三、同、七、年、二、月、十九、日
通孝上表、義隆、管領、三、三、三、三、三、
正長元年、管領、義隆、再、任、号、三、三、三、

皇和真佑通

廿五の老後
花園の季

子永享元年八月

教以保新義深再為管領云々

是起銘云々應永九年八月十日富山左衛

門督滿家入道通編再補一正長元年

波我浮智之再補云々管領云々

頭云々以呂波字數抄

クシレイ云々常用身位

シレイ云々人頭也云々

又或人首送云々

弁官云々羽林並之時

為殿上管領今又如此仍舊殿上座之時
乱位次管領頭可著身位由先々所決
舊了仍為中右之人殿上滿解日皆以申
降不考是為不考下款云々
武家管領の據裏抄七の老并子
鎖上申込此ノ事也本ノ執事ト云キ大御
所ノ御時高師直朝臣之ク此職アリシ
執事ト号ス
成テヨリ以来管領ト申也云々海人
下子細川武藏守頼之進ハ執事ト存ス

弁官云々羽林並之時
應永廿九年
正月二日の季
正長元年
八月十日
富山左衛門督
滿家入道
通編再補
一正長元年
波我浮智
之再補云々
管領云々
頭云々以呂
波字數抄
クシレイ云々
常用身位
シレイ云々
人頭也云々
又或人首送
云々

其以後皆稱管領如此子依附可欽也
管領の字面は金唐詩胡管身子管領者
用總不知也改或身子姪女不稔難管
領（管領）管は總統の稱之品字管（管身子）管
綜理其事也史李斯傳趙高曰管得以上
刀筆吏選入孝宣管身二十餘年漢
劉向封事管執在機又主當也禮樂記
禮樂之說管年人情矣註猶包也又先
子聖人道之管總統也又唐代宗分
河北諸州節度為六管云一和名物國郡

部子 異國管若干郡 とあり 其國府を
郡司を管領けりし
解（解） 十五丁表

忘穢（忘穢）のゆし 拾芥抄 下末 簾中抄 下侍中
群要（群要） 七の巻九の 永正記 卷上 塩巻抄 十三の巻
石類書（石類書） 百廿二の巻 ながさのわがわが あり くらえ
甲乙丙丁の品あり
院（院）の序 猶（猶） 十五丁裏

後小松院の序 猶（猶） 子 猶（猶） 子 依（依） 子 依（依） 子 依（依） 子
論語篇 先進 子子曰 回也視之猶（猶） 父予

不得視猶子也六臣伝本文選五十六卷清安仁
楊仲武誅二視猶父不得猶子三
たどあし一猶子字面なふ一古事談一
子後一季院御宇、小野宮右府奉仁降目、
執筆之時、被申於振録云、天曆舊臣、
實資中振津、因候被優七代奉公、
而所給、因被向天氣、即勅許、目
司三猶子資頼ラナシ候也トヤカテ被書
入ケリ云々、又卷二待賢門院谷川院御
猶子之儀、三全入内流、其同法皇氣遊通

信一参考保元物語卷一、後白河院御即位
のとき、孝徳院上申、八御講ハ、顯仁鳥羽院弟
一皇子、御母侍賢門院藤原璋子、大納言
公實卿女也、永三年丑月廿八日、御誕生、大
上天皇白河ノ御猶子ニテオシス云々、平
治物語卷上、信西出家のとき、從信西上申ハ、
南家博之長門守高階、經敏カ猶子也、
云々、古今著聞身二表廿二、慈母の女御、
信西モ、猶子モ、云々、情然のん一、宮子一
云々、又廿五表、八宮お西の御母の御大

教院一系子の内行子云々、
上卷仁 西院の西院の内行子の義子也
卯の字 又、
日老伏 又、
見の字 又、
五原郡房の女官の師宣の女行子云々、
又、
け長も内行子にして、
此外行子の云々、
門子、猶子、義、養子也、
子也、
義也、

意、則、
の、
撫、
ハ、
養、
猶、
字、
ナ、
ノ、
世、

禮記檀弓上ノ喪服ニ赤之
子猶子也ニ十字文ノ猶子
比况ニ李羅注下卷ノ禮記曰
之子比也之ヲ曰猶子云々

心也猶子ノ二字ヲヒトヨク也云々
と云運歩色母身 細ノ猶子イウニ
弟ノ子とシテ云々 世々
云々物部氏卿が南留引た卷ノ猶
子ノ子云々 俗に云々 人の公
云々子云々 大平記
山門攻の字ニ此の是所守にお軍ノ執事高
武蔵守所直が猶子ノ弟ニ云々

養子ノ子とシテ云々 猶父 論語
世家 猶母 猶母
物 猶母 猶母
林 猶母 猶母
云々

口遊 十丁裏

太平記音義 上卷十 口遊 十丁裏
下卷廿 口遊 十丁裏 又 下卷廿 口遊 十丁裏
七丁裏 口遊 十丁裏 又 下卷廿 口遊 十丁裏
七丁裏 口遊 十丁裏 又 下卷廿 口遊 十丁裏
七丁裏 口遊 十丁裏 又 下卷廿 口遊 十丁裏
七丁裏 口遊 十丁裏 又 下卷廿 口遊 十丁裏

史記の巻文 阿闍梨首の申状符命之由
永三六の字 及口遊七の巻子 思管抄七の巻子 児女子の口遊
とてことしを地をうりまするのちのさし建武
年間記の口遊 去年八月二條河原落書
を京童の口遊をさし下字集の口遊
クチガサしを口遊用集久部言の口遊 クチガサ
を運歩色集集部の口遊のクチガサしを
清輔集の

片をさるの事かたしとてねたりの
をびらぶのり大木集藤十の俊頼

新をくたの釣舟をひし山だの
とをびらびらした注よけの田田を
かすはらぶをさるのあしとて山だの
くちびらびらしてさるのあしとて山だの
とてさるのあしとてさるのあしとて山だの
しとてさるのあしとてさるのあしとて山だの
以外 俗式 仁母の歌同日奉十の表 同やどり本
九十九 同あつあや六丁表 同手習共 枕草紙者
お茶二の巻 七丁表 同四の巻 狭衣活字奉一の上巻 三丁表 同
お茶三丁表 同三の巻 ナ丁表 三丁表 同三丁表 一の下巻
三丁表 堤中納言 志保おのり三丁表 金草紙上

同下 和京式部集、卷一の崇式部集、無海集、
連歌 上公任集、敬不集、^{十の巻} 木本集、^{連歌} 清心寺、
びきみくらいさかたごころ初而く尋るそか下
ひきびらひきびらとて口説し空穂、^{七丁} 存の右表、^{七丁} まことばがまをいひのやあとし、
そのあつるそあまをいひはさふようけ たあ
とまこころいひき、同春日詣表、^{十丁} 子に佛の
はるの物のみ いとまこころあまをいひ あして
あつるふきとこええさあまをいひ あ言え
あまは為憲、口遊、序、願、為、此、巻、於、掌、底、

之 玩、常、為、其、文、於、口、中、之、遊、而、言、之、百
練抄 ^{古の巻文曆元}、庚子有改元事、天
福字、自始、世人、不受、諒、周相、續、為、其、
徹、之、由、口、遊、そ、か、の、口、遊、ハ、ク、チ、ス、サ、シ、と、訓
つ、く、ヤ、ク、チ、ア、ソ、ビ、と、訓、つ、く、ヤ、其、證、を、た、ら
ぬ、一、下、学、集、節、用、集、逢、安、色、母、集
ひ、ひ、口、號、の、字、を、ク、チ、ス、サ、シ、と、訓、わ、ど、日
本、記、雄、略、記、辨、悉、明、記、の、字、を、ク、チ
ツ、ク、タ、と、み、述、解、記、の、字、を、ク、チ
ク、チ、ツ、ク、タ、と、み、り、し、

蘇子瞻信爲子志之所
紹隱士者非然其身
而身也非用其言高
不世也非用其言高
時命大謬也高時命而之行
乎天不則爲一也高時命而
大府乎天下則在根極而得
此存身之道也三史記信隱居
信子魏有隱士曰

卅の何照信子故世論以堅
考考隱士云

隱士の家 十五丁象

後梁先院は隱居をわたり、みま家より
とて後花園院皇統を継ぐなり。隱
士の字面は文正也。左大帥招隱詩、
杖策招隱士、度用府尊。卷の詠畫
肩風節子仲者微隱士、同集卷の玉
懐山銘子、隱士彈琴、仙人看博、南史

同七十五 朱百年信子、是朱隱士所書、須者、
白氏文集、卷の顯揚、
隱士西亭、三内口、訣子、

南方の所叙及

ナニ表

南朝記傳

正長元

年の癸卯七月初帝以愷

子切りしや **な** **あ** **い** **は** **世** **を** **お** **ぼ** **も** **な** **ず** **も** **儲**

君や **け** **時** **源** **流** **の** **心** **を** **あ** **ら** **へ** **る** **も** **帝** **の** **意**

は **位** **を** **あ** **り** **し** **と** **い** **は** **れ** **り** **が** **も** **さ** **る** **也**

お **び** **き** **お** **ず** **か** **ら** **ん** **左** **の** **後** **一** **位** **守** **房** **以**

て **世** **を** **治** **め** **し** **心** **を** **使** **り** **し** **御** **の** **事** **も** **一**

院 **を** **左** **子** **お** **り** **し** **も** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り**

漸 **お** **り** **院** **の** **信** **を** **お** **し** **使** **ら** **る** **も** **す** **か** **ん** **一**

和 **局** **同** **一** **心** **を** **あ** **ら** **へ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り**

世 **を** **治** **め** **し** **心** **を** **使** **り** **し** **と** **い** **は** **れ** **り** **仙** **洞** **の** **皇** **は** **あ** **ら** **し**

の **心** **を** **使** **り** **し** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り**

と **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り**

と **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り**

と **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り**

と **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り**

と **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り**

と **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り**

と **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り**

と **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り** **と** **い** **は** **れ** **り**

三月南方の東交寛成視之正長元十二年或人談云伊勢國司左方
辨、内信の以るべき信務の事、其
ありし内信友、同司小島を以て信人、又其死
を左軍を以て信人、其死を以て信人、
記正長元十二年或人談云伊勢國司左方
信雅依鎌倉老兵衛督指氏卿命考、取
小倉宮之由有同、而彼鎌倉使者非實
使、其稱鎌倉使、企謀反、可上流、仍可相
憑、彼命、其取之由、示滿雅、滿雅存
實、儀之由之如此、事漸、密顯、彼使者忽

遊了、小倉宮當、念、何賀方、流、然、而
滿雅謀逆不穩、使、早、殺、向、可、改、之、由、左
典、既、被、仰、分、土、岐、壹、言、一、地、上、南、朝、記、傳
南方、東、宮、寛、成、初、王、と、有、い、寫、録、ある、下、
南朝後、亀山天皇、明德三年、閏十月五日、後
小松院と、即、合、時、を、入、洛、の、後、嵯峨小倉宮の
よ、お、何、を、應、永、世、二年、四月十二日、册、御
あり、所、子、小倉宮尊仁親王、其、子、小倉宮尊教
尊、教、尊、興、後、勸、修、寺、教、事、權、僧、本、と
カ、い、げ、尊、興、の、後、尊、成、と、い、説、く、と、ある、
寛成、長、慶、院、の、事、カ、い、げ、

あは日考史 後龜山 天皇紀 宣和真伝通 廿七の考 南

山巡狩録 附録後小松社 光後花園の寺 ひと通考し 廿七の考

○叛及の字面 出知未考 晋書 載記 符暨

紀 下 恩其及叛之然 あり

競望 のび 十六下表 三項 政要 の考 及 及 及 及 伏誅

帝位を競望し ふ 中 小倉宮の節

子 勸修寺の考 勸修寺の考

教尊権僧正 五祥寺勢 帯 南方

小倉宮 後村上天皇孫 男同帝之孫 云々

同帝と上文の尊聖大僧正後村上天皇

第一皇子 寛成親王 号長慶院 南方 玉川宗易 云々

ある 續 後村上の 云々 競望は あり

ひ 云々

原 手 盛 長 記 三 浦 云々 他人 競

七 部 計 云々

覚 望 云々 下 学 集 下 卷 十一 競 望

競 望 同 云々 部 子 競 望 云々

三 云々

Handwritten text in a cursive script, possibly a form or ledger entry, written on aged paper. The text is organized into several lines, with some parts enclosed in a rectangular box. The script is dense and difficult to decipher without a key.

~~Handwritten text, possibly a form or ledger entry, written on aged paper. The text is organized into several lines, with some parts enclosed in a rectangular box. The script is dense and difficult to decipher without a key.~~

禪律の沙戒師 五丁表

鹿苑院は臨濟派の禪宗にて院主常光國師八持
律の僧も多し禪律といふそれを沙戒師をして沙
受戒りしを禪律の沙戒師その先例もいふ事なき
新といふ事

田植 六丁表

古練抄 崇徳大治ニ
臨常寺 羽殿有田植興又
日三十五
西院 崇徳宮水園有
田植事

弟花物語沙忌裳の巻に 沙戒師 といふ事あり
お目よぬぬ大言土沙の殿よわいし海をど後の法
茶おほきとて沙戒せよとておかしめしと
沙戒の沙まわのゆきさ此田の後のおしりせがぬ
のともん 沙戒 といふ事此沙うべかりひきまど沙戒の
解 沙 といふ事此田うぬ日例のゆりし海あづけくあ
むちるものもたし物なこかまういふはゆりの
まらして此南の方けむま場の沙門より 沙戒 といふ事
かまし 沙 の 内 といふ事 沙 といふ事 沙 といふ事
丑寅の方け 沙 をくばし 沙 といふ事 沙 といふ事
やま 沙 といふ事 沙 といふ事 沙 といふ事 沙 といふ事
おとうけき 沙 といふ事 沙 といふ事 沙 といふ事 沙 といふ事
と 沙 といふ事 沙 といふ事 沙 といふ事 沙 といふ事
と 沙 といふ事 沙 といふ事 沙 といふ事 沙 といふ事

慈恩傳 此の卷
 脂那因命之天子也 孝王者即
 此所錄者 孝王云々天中記十
 五部 子梁の王信辨が孝表
 を引て 傳
 角類 之 **皇極** 既
 竟始有 長女之捷 も こ と
 て皇極 子登 の り 文 し
 皇極は

陛下登極方始蕭條云々 錢起集全唐に堯皇
 未登極此地曾游覽云々 尚書洪範篇に五曰
 建用皇極皇建其有極云々 惟時厥庶民于汝極錫汝
 保極九厥庶民無有淫明人無有比德惟皇作極云々
 汪子皇大極中也九立事當用大中之道云々 疏注疏本
 卷に正義曰皇大也極中也施政教治下民當使大得
 其中無有邪僻故演之云大中者人君為民之主當
 大自立其有中之道以施教於民云々 周礼天官冢
 宰子設官分職以為民極云々 汪子各有所職而百事
 舉極中也 於天下之人各得其中不失其所云々 文

選 六臣注平四 顔延年曲水詩序に然其宅天衷立民
 極莫不崇尚其道神明其位拓世貽統固萬葉而為
 量者也云々 汪子良曰宅居衷心也極本也言天子居天
 心立人本莫不崇高宴樂之道以敬守其位也神明
 敬也云々 汪子人君中有の道を極といへり
 登極位 **皇極** 登紫極 の 字 と 者 て い へ り ゆ も
 以べ 宋書武帝に去未據極位云々 且桓玄
 雖以雄豪見推而一朝便有極位云々 本朝に極位極
官と撰家のゆゑに
いふも貞觀政要君道篇に位極台司などありと臣下の極位の義
せんごころに桓玄が未據極位云々有極位をいへり天子の位の
慈恩傳 五の卷に 秦王 者 即 脂那 因 命 之 天 子 也 味 登

△晉書阮神傳負觀政字
納諫篇たけなほ紫極の字面
之南齊書王儉傳子宋明
帝紫極殿とあり

皇極之前封為秦王云魏書卷五の文德郭皇后傳

注し龍飛紫極作合聖皇云晉書阮神傳者心

紫極云南齊書王儉傳上壞宋明帝紫極殿云

負觀政要納諫に陛下高居紫極密澗蒼生云

西これよりんえこれこ

ぜん坊 六丁裏

前坊の事已よ上に注せり

国衙 七丁裏

国衙已以上よんゆ

ろく名 七丁裏

名のこほて実るんとい義に伊領不乃名目にて
実る知り一はあふれを節用集字部言
有名无實ウミヤウムジツ云々運歩色葉集評に有
名無實ウミヤウムジツ云々有名の字ハ礼記左傳に
有る無實の字は易礼記揚子方言論衡云云見
えて漢籍の所見奉るに違はらん

回祿 七丁裏

下学集神祇よ回祿火神名也故呼炎上云回祿也云々
運歩色葉集評よ回祿クワイロク火神名云々太平記
音義下の一に回祿クワイロク云々有識小説下よ回祿

